

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 6 年 4 月 21 日現在

機関番号：16102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19993

研究課題名（和文）CP領域の階層性と文末形式の多様性に関する理論的研究

研究課題名（英文）A theoretical study on the hierarchy in the CP domain and the diversity of sentence-ending forms

研究代表者

森山 倭成（Moriyama, Kazushige）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師

研究者番号：00967755

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：自然言語におけるCP領域の階層性と文末形式の多様性についての研究を行った。節周縁部の階層構造に関する仮説に基づいて、日本語におけるコピュラの研究と終助詞の文法化についての研究を行い、自然言語の階層性について新たな知見を得ることができた。コピュラについてはCP領域ではなく、CPより下位の投射に生起することを示し、終助詞については「じゃん」や「っけ」がCP領域に生起する要素として再分析された形式であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自然言語におけるCP領域の階層性と文末形式の多様性について、経験的な言語事実に基づく分析を行った。さまざまな経験的なデータを発掘したことにより、言語変化に関わる言語理論に寄与することができたと考える。最終成果を応用することで日本語教育や言語学教育などへの貢献も期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study has investigated the hierarchy in the CP domain and the diversity of sentence-ending forms. Under the split-CP hypothesis, the research has been divided into studies concerning the syntactic positions of the copulas and grammaticalization toward clause peripheries in Japanese. As a result of research, many novel insights have been obtained about the hierarchical structures of natural language.

研究分野：言語学

キーワード：「ではないか」構文 CP 階層性 統語変化 コピュラ 「かどうか」 等位接続構造 文末形式

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本語は多種多様な文末形式を豊富に有する言語である。文末形式とは、(1) のように、時制要素「た」より右側に現れ、(CP と呼ばれる) 文の最も右端の領域に位置する要素を指す。

- (1) a. 太郎は優しかった た です。 b. もう飯は食った た か。 c. 今日は楽しかった た ね。

このような文末形式の分布を捉える仮説には、単一 CP 仮説 (Chomsky 1986) と分離 CP 仮説 (Culicover 1991; Rizzi 1997) の二つがある。単一 CP 仮説は「た」の右隣に単一の語のみが現れることを保証し、分離 CP 仮説は複数の語が現れうることを保証する。ここで、日本語に目を向けると、(2) のように、「た」の右側に複数の語が生起できることから、分離 CP 仮説のほうが妥当であることがわかる。このように、日本語は、分離 CP 仮説の追究にあたって好都合な言語であり、言語理論に対して重要な問題を提起する。

- (2) 太郎はピザを食べなかった た です か ね。

日本語の文末形式に関するこれまでの研究では、Rizzi (1997) の初期的な分離 CP 仮説が援用されてきた (Hiraiwa and Ishihara 2012; Saito 2015; 遠藤・前田 2020)。しかし、Rizzi の分析は、イタリア語の言語事実に動機付けられたもので、「です」や「よ」のような日本語の文末形式を扱うことが困難である。日本語の文末形式を統一的に扱う仮説は未だ確立していないのが現状である。本研究は、この問題を解決するにあたって必要となる研究である。

上記の学術的背景から、本研究においては、(3) の二つの問いを立てる。

- (3) a. 日本語の言語事実からどのような分離CP仮説を構築できるか。
b. 日本語における各文末形式はどのような文法特性を有しているのか。

まず、日本語の言語データから新たな分離 CP 仮説を構築する必要がある。このことから (3a) の問いが立つ。次に、日本語は、(1) にあげた例以外にも推量辞「だろう」や確信を表す「じゃん」、終助詞「もん」などの数々の文末形式を豊富に有している。(3b) のように、このような文末形式の文法特性の解明が二つ目の問いである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の言語事実に動機付けられた分離CP仮説の追究と各文末形式の文法特性の解明である。本研究では、博士論文 (森山 2022) で提案した (4) の分離CP仮説を仮定する。(4) に基づくと、時制要素の「た」の右隣には、丁寧語のように聞き手への敬意を表す語が現れる。その次に、「だろう」や「つけ」のように、認識・判断に関する語が生起する。続いて、疑問を表す終助詞の「か」のように、文のタイプ (平叙文・疑問文・命令文など) に関わる語が現れる。その後、終助詞「よ」のように、強調を表す語が生じる。最後に、終助詞「ね」のように、聞き手に対する応答要求に関わる語が生じる。

- (7) a. 太郎が犯人だろう。 b. 今日は休みじゃん。
- (8) a. 太郎が犯人だだろう。 b. 今日は休みだじゃん。

4. 研究成果

研究期間を通して、研究項目①と研究項目②について、以下のような研究成果が得られた。

初年度は、「ではないか」構文を中心に、日本語の文末形式の統語構造を3階建ての分離 CP 仮説に基づいて説明することを試みた（研究項目①および研究項目②に対応）。森山（2022）では5階建ての分離 CP 仮説を提案したが、若干の修正を加え、三層構造を採用した。「ではないか」構文の3つの下位クラスの統語特性を観察し、それぞれのクラスの統語構造を部分的に明らかにすることができた。「ではないか」からできたと考えられる「じゃんか」や「やんか」についても新たな言語事実を発掘することができた。これに関連する内容は国内学会（日本言語学会第164回大会）のワークショップで発表した。「だ」の C(Foc)主要部仮説が提案されているが、この仮説は妥当ではなく、「だ」は TP より下位の領域に生起しているということに関西言語学会第47回大会で発表し、研究者と意見交換をした（研究項目②に対応）。この他にも、The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK30) に投稿したアブストラクトがポスター発表で採用されたが、校務の関係で辞退せざるを得なかった。

最終年度は、3階建ての分離 CP 仮説に基づいて、「ではないか」構文の統語特性を明らかにしたに加えて、「じゃん」や「やん」のような「ではないか」構文の変異形が上方再分析 (upward reanalysis) と呼ばれる統語変化によって生じた文法形式であることを突き止めた（研究項目①に対応）。この内容をまとめた学術論文は本研究期間終了後に出版予定の書籍に掲載されることになっている。統語変化に関しては、「ではないか」構文以外にも終助詞「つけ」などについて考察を加えた。神戸大学言語学研究室年末研究発表会にてその内容を発表し、研究者と意見交換をした。また、初年度に関西言語学会にて研究発表を行ったコピュラの構造位置についての学術論文が査読を経て KLS Selected Papers 5 に掲載された（研究項目②に対応）。加えて、埋め込み節を導入する「かどうか」についても新たな言語事実を発掘することができた。「かどうか」は単一の補文標識ではなく、等位接続構造を有していることをいくつかの経験的事実に即して示した。この内容については、日本言語学会第167回大会にてポスター発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森山倭成	4. 巻 5
2. 論文標題 「コピュラの階層位置について」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本秀樹，森山倭成	4. 巻 3
2. 論文標題 「標準日本語と肥筑方言におけるノ格主語の構造位置について」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小川芳樹・中山俊秀（編）『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』	6. 最初と最後の頁 242-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森山倭成
2. 発表標題 終助詞「っけ」の統語変化について
3. 学会等名 神戸大学言語学研究室年末研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森山倭成
2. 発表標題 補文標識と等位構造
3. 学会等名 日本言語学会第167回大会
4. 発表年 2023年

1．発表者名 森山倭成
2．発表標題 コピュラと節の周辺部
3．学会等名 関西言語学会第47回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 森山倭成
2．発表標題 日本語分裂文における移動と統語構造
3．学会等名 Okayama Linguistics Forum (OLF)（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 森山倭成
2．発表標題 節周縁部と「じゃないか」系表現
3．学会等名 日本言語学会164回大会（ワークショップ「語彙と語用のはざまで」）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 畠山 雄二、岸本 秀樹、木戸 康人、眞野 美穂、三浦 香織、森下 裕三、森山 倭成、永富 央章、中嶌 浩貴、臼杵 岳、依田 悠介、于 一楽	4．発行年 2023年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 332
3．書名 「英文法用語大事典」シリーズ 第1巻 文	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------